

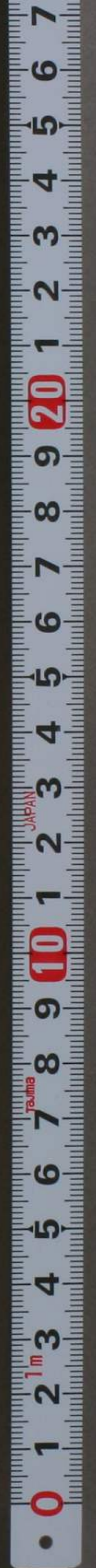


伊豆母迺美多麻

初篇

三

ホ 2
276
3止





伊豆母廼美及麻三之卷

川北丹靈翁著授

芥木藤原元達 校定

言語清濁兼相通之辨

五十連音ハ清音五十音トテ五段十行ハ分ト、その中ハ、
カノ行十ノ行、下ノ行十ノ行ハ濁リ音ト兼たり、
然レども濁リ音ハ一音トテハ詞トあり、又、
の首トあり、ラノ音トあり、上下ノ

三ノ巻
一

その便よ、七たうふ音よていといや—き音あり遠
 方とエシンパウ。八方とハツパウ。慮とオモシパカル坊
 羽とセツパ。雜費とザツピ。卑夫とヒツプ。日本とニツ
 ポン。泥亀とスツボン。金米糖とコンペレタウ。あど唱
 ふる類ひハ、雅言よハ、あ—板連音の五段十行よ通音
 わり不通音ありすと古書の注釋よ混して猥りあ
 るもみえたり。初二。初三。初四。初五。二三。二四。二五。三四。
 三五。四五の通音ハ、韻鏡の説よ—て國語の通ひよあ
 らず國語の通ひハ、天地の自りうりの命ありて私よ通
 りず—とありず相通片通或ハ片通の變格或ハ相通

の變格種々差別あり相通ハ、一三五、亦二四あり其餘
 ハ片通よて精く下よ云せて其通ふ音も調べよより
 木挽と、コビキ、火口と、小グチと、しへと、木耳と、コクラ
 ゲ、火打と、小ウチと、ハ、云々—とありあべ—又約り
 たる語の再び轉してしへる語ありたどひを藁鞋ハ
 ワラグツありと。再ヒラニ轉シテワラヅト云り—と。
 ワラゲト云ハ、訛りあり。鞆ハ、吹革よて、レハキの音便
 再ヒゴニ約リシテフレゴと、しへり此類ひ尋—又古へ
 と今と言の移りたるもありたどひを夢といひ—
 イメといへると今ユメといひ—鱗とイロコ

三卷
 三

タチツテトナニ又子ノと同音ミて通カして用カふ
 音あり又バビブベバハマミムメモと等し常は通を
 一用ふ音あり又ハヒフヘホと語の中下よてワ
 ウエヲのこコトくハハ語の音便ヒキキよて既よ一卷
 よいへとも猶下の音便の條よいへべー又カキクケ
 コトラリルレロと音ハ響合ヒキキて聞カゆとも遠ト音也
 真測ガ語意考ニ苛カイガイ振ヲフギフリ瀧ヲタ
 ギタリ彫ヲエグエル減ヲヘグヘル我ヲワゴワ口ナ
 と奉テ通フ音トイハレキシカレドモタギハタギ
 ト活キテ速ク川ノ瀬ノゴトク強ク急シク落ルナリタ
 リハ弱クユルヤカニ落ルナリ振ハフリリゴカスニ
 テフハト活ク音フギフグトハ活テカズ書紀一書ニ
 後ハ例ノアヤマリナリ又書紀ノ揮ノ字ヲフキト訓
 別ナリヘグハ物ヲ薄クヘギヘグナリヘルハ自ラヘ
 ルニテ語ノ意自他ナリ是等ハ通音ニアラズ又播磨
 國ノ風土記ニ萩原ニ息長帶日賣命ニ宿此村一
 夜向生萩根高一丈許依名萩原トアルハリハ國訛ナ
 ルベシ此萩ト榛トヲ人々論アレトモ慥カナラズ萩ハ
 波岐ナリ榛ハ液理ニテ其實ヲ採リテ漆ニ極トスルモ
 ノナリ又木萩ト云フモノアリトユハ常ノ草萩ト葉
 モ花モ等シクテ榛ノ木トハイサミカモ似寄ラヌモ
 ノナリ又榛ノ字玉篇ニハ訓ナシ四聲ニハカラタチ
 ハシバミトアリ和名抄ニ榛子唐韻云榛ハ和名波之
 波美榛栗也トアリ又遠江國ノ郡名ニ榛原ト書テハ上
 ヲハリト訓メリ又遠江國ノ郡名ニ榛原ト書テハ上
 バラトアリテ本草ノ字玉篇ニハシカニナリイタハ
 クトアリテ木草ノ意ナシ蓋シ波理ヲハレト訓メル
 ハ訛リナリリノ音使ハニツニテトハイハ
 ズ又武藏國榛澤郡ヲ拾ニ抄ニハハンザハトアリテ
 其地榛澤六郎ノ旧跡アリ又万葉集ニ七ねむのわを
 トイヘリ猶ヨク考フベニ

点シタルハ古事記ニ依リタル後ノワザナリ又エグ
 ハエグルト活キエルハエルトハタラク音ニテ語意
 別ナリヘグハ物ヲ薄クヘギヘグナリヘルハ自ラヘ
 ルニテ語ノ意自他ナリ是等ハ通音ニアラズ又播磨
 國ノ風土記ニ萩原ニ息長帶日賣命ニ宿此村一
 夜向生萩根高一丈許依名萩原トアルハリハ國訛ナ
 ルベシ此萩ト榛トヲ人々論アレトモ慥カナラズ萩ハ
 波岐ナリ榛ハ液理ニテ其實ヲ採リテ漆ニ極トスルモ
 ノナリ又木萩ト云フモノアリトユハ常ノ草萩ト葉
 モ花モ等シクテ榛ノ木トハイサミカモ似寄ラヌモ
 ノナリ又榛ノ字玉篇ニハ訓ナシ四聲ニハカラタチ
 ハシバミトアリ和名抄ニ榛子唐韻云榛ハ和名波之
 波美榛栗也トアリ又遠江國ノ郡名ニ榛原ト書テハ上
 ヲハリト訓メリ又遠江國ノ郡名ニ榛原ト書テハ上
 バラトアリテ本草ノ字玉篇ニハシカニナリイタハ
 クトアリテ木草ノ意ナシ蓋シ波理ヲハレト訓メル
 ハ訛リナリリノ音使ハニツニテトハイハ
 ズ又武藏國榛澤郡ヲ拾ニ抄ニハハンザハトアリテ
 其地榛澤六郎ノ旧跡アリ又万葉集ニ七ねむのわを
 トイヘリ猶ヨク考フベニ

第一段ト第五段トノ音ハ第三段ノ音ヨリ開發

第四段ノ音ハ第二段ノ音ヨリオゴル

第五段ノ音ハ第三段ノ音ヨリオゴル

第一段ノ音ハ第三段ノ音ヨリオユル

第二段ノ音ハ第二行ノヤヲ孕ム

第三段ノ音ハ第三行ノ音ヲ孕ム

正音トハ

第一ハアヤワカサタナハマラ 第二ハイレキニチニヒミリ
第三ハクユウクスソ又フムル 第四ハエエケセテオヘメレ
第五ハオヨヲユソトノカモロ

産音トハ

第一段ト第五段トハ發聲スルニウアエヤウワタカスサ
ツタ又ナフハムマルラ又ウオユウラノコソツトス
フカムモルロ第四段ハイエ上エキケシセチテニチヒ
ミメクレト第三段ノ音ヨリ第一段ト第五段トヲ産ミ弟
三段ノ音ヨリ第四段ヲ産ムヲ云フ
第二段ノ音ハ和音ヲ加フレバヤノ音ヲハラミテイヤ
シヤキヤキヤシヤチヤニヤヒヤミヤリヤ第三段ノ音ハ
ワノ音ヲハラミテウワユワウワクワスワツワ
ムワルワト第二段弟三段ヲ引テ呼ブ時ハヤワノ韻アリ

生音トハ

和音トハ

正音ニ産音生音ヲ組テ其レニ合音ノ韻ヲウト引時ハ相通ノ音ハオノツカラ同シ音ニ便クナリ是ヲ今和音ト号ク

ヤ行ハ、ヤ、イ、レ、イ、エ、イ、エ、イ、ヨ、と、アの行の第二段の

イより生音トハ行ハ、ウ、ウ、ウ、ウ、ウ、エ、ウ、ウ、と、アの行

の第三段のウより生音トハウを其二段の緯の通ハ、マ

の音と生音トハ三段の緯の通ハ、ワの音と生音トハ上の圖

のこゝと一是彼合せて相通の理いと知るべし

片通音の辨

片通の音ハ、第一段より、第二段、通ひ、第二段より、第三段、第三段より、第四段、第四段より、第五段、通ひ、又第二

段より五段^エ通ひ上へて上より下への通ひてを返して六通ひぬ音の片通ひより又第一段と第四段とハ第四段より第一段^エ通ひて上よりハ通ひぬ音あり故是と今片通ひ變格と号く亦ヤ行の第四段と五段との通ひハ並ての格とハ異よて相通あり精くハ下の第四第五の通ひの條よ、まづべし、まづて音の通ひ此格よ、まづきたるハ訛言と知るべし、若此格よりなりて通ひハ、語ありハ、古書よても誤りあり

第一段と第二段よりて唱ふるハ

違を^{タカヒ}チガヒ^モ股帯と^モモ、ヒキ

第二段と第一段より唱ふる言あり

宜長ガ古事記ニ久羅下那須ハ如クト云フ
 意ニテ吾徒箱掛ノ大平ガ似須ナルヘシト
 云ルサモ看ベシ那ト途トハ通フ音ナルト
 へニ那須ト能須ト云ルモ右ト和名抄ニ備
 中ノ郷ノ名ニ近似ハ知如乃里ト見ヘ又似
 ヲ漢藉ニテノレリト割ナトヲ合セテ思ヒ
 ハ似須ヲ那須ト云ツベキモノゾト云ルハ
 言語ノ通ヒヲ知ラザルエモノヒガコトナ
 リ抑備中ノ郷ノ似ヲノリト云モ漢藉ニテ
 似ヲノレリト訓ムモノニ段ヲ五段ニ唱フル
 片通レノ格ナリ似須ヲ那須ト通ハシテハ
 二段ヨリ一段ニ移スニテ例ト快ハスヒガ
 コトナリ

第二段と第三段より唱ふるハ

サルヲ今一度定ムル音ノルヲ添ヘテサ
 ルエルヒカセムルケルステルツカ子
 メルツタヘルミタレト四段ニ唱フル
 俗言ナリソヲ三ツカ又ルムルウカ
 フルヒカスルストツカ又ルムルウカ
 俗言ハ通耶ノ詞ニテヤニギ言ナリ然レト
 二ハアラズ又四段ノ終ニ俗言ト思フモ非
 ナリ又ハ四段ノ音ニイハズテハアラメニ
 フトキハ第三段ニハリ一夜寝ニケリ十
 キナドハ四段ノ音ニイハズテハアラメニ
 カケマクツカ子ムツタヘキミハアラメニ
 ナリ又ハ四段ノ音ニイハズテハアラメニ
 フトキハ第三段ニハリ一夜寝ニケリ十

第四段と第三段は唱ふる言あり

第四段と第五段は唱ふるハ訛言あり

屋根と

ヤノ

ハ訛言あり

第五段と第四段は唱ふるハ俗言あり

特牛と コテヒウシ 臍と

第五段と第四段は唱ふるよヤのくごりハ異

音よて餘の行の例はあらず第一第四第五共

和音の既ニ上ニコトハウと添えて音と引ハ別

第一	ヤウ	第四	エウ	第五	ヨウ	第一	カウ	第四	ケウ	第五	コウ	第一	サウ	第四	セウ	第五	ソウ
第一	ワウ	第四	エウ	第五	ヨウ	第一	カウ	第四	ケウ	第五	コウ	第一	サウ	第四	セウ	第五	ソウ
第一	タウ	第四	テウ	第五	トウ	第一	ナウ	第四	ゾウ	第五	ノウ	第一	ハウ	第四	ヘウ	第五	ホウ
第一	マウ	第四	メウ	第五	モウ	第一	ラウ	第四	レウ	第五	ロウ	第一	ハウ	第四	ヘウ	第五	ホウ

如斯第一と第五とハ同音よ便けども第四の引

音ハ等一ううず第十四五とあり同音又響くハ
 ヤのくぐりのあり日吉と七工住吉とスミノ
 エともいひ又天地紀の童謡は美曳之弩能曳之
 弩能云施麻倍母曳岐今本ノ訓点曳ヲヨトヨ
 誤リナリ曳ハ弋勢ノ切エレナリ又弩ハ奴戸ノ切
 ノナリ書紀ノ古讀ノナリ國學者能ヲ奴ト云ガ
 古言ト心得タルヨリカハルヒ
 ガコトノサカシラハスルナリ又萬葉集十四ノ
 栲衾あゝ山風の禰あへともくろくあそきのあろ
 ころろえともとあゝとも又曳岐も考よ吉あり
 第四段と第一段は鳴あゝハ片通變格なり
 黏コエシと原玉ヤシコエシと聲高と言コワダカ

聲色と コワレロ 篁と タカムラ
 酒臭と サガナ 風車と カザグルマ
 手枕と タマクラ 手綱と タツナ
 船渡と フナワタシ 鐵物と カナモノ
 苗城と ナハシロ 目尻と マジリ
 雨傘と アマガサ

第一段の音と第四段の音は呼ハ訛言あり但シ
 此訛言ハ上中七の音より受る語は限りて餘の
 音より受る詞はハハハ卑者のこととあり
 組合と クミエト
 念と語ノ下ニテハヤヒト云フナリ
 其ヨシハ二卷ニ云リ

歸 <small>カヒル</small> と	ケヒル	二階 <small>ニカヒ</small> と	ニケヒ
賤布 <small>サレフ</small> と	セレフ	太鼓 <small>タシコ</small> と	テレコ
大工 <small>ダイク</small> と	テレク	内證 <small>ナシヨウ</small> と	子レシヤウ
這子 <small>ハビゴ</small> と	ヘセゴ	參詣 <small>マシヨル</small> と	メキル
迷子 <small>マシゴ</small> と	メセゴ	マヒゴハマヨヒノ畧語	ナリ
來年 <small>ライネン</small> と	レネン	雷除 <small>ライヨク</small> と	レヒヨケ

右ニ引ベキ語ナキハ文字音ノ語ヲ出セリ字音ノ語ニテモ國語トシテ用ユル時ハ惣シテ國語ト同シ用格ナリ

皇國ミクニマナビ學ガクと云々、と云々、ハ先五十連音イソツラフの相通ツラフハ片通ツラフおの差別ケダマと能アタヒく嘗アタヒて後國字アタヒつうアタヒひと會得ユキエカすべし然シカらざるとハ古書フルブシと讀ヨクみ其意コトバと知シるも僻言ヒコトバと云々、

相アヒ亦言靈アヒの備アヒは變格カヘリあるもの粗アヒありそハかの宜長アヒが詞アヒの玉緒アヒよ、いへる變格カヘリあるもの異アヒあるものよて變格カヘリ毎アヒよ悉アヒく義理アヒある自然アヒのものあり

鼻音之假字ハ 國字用格

鼻音ハの字ハ、㊦㊧㊨の四字ヨウと假ルカヘリのゝえと、皇國ミクニの字ハのゝ鼻音ハは假カヘリるゝゝハ國字ミクニの音ハはあゝず、五十字イハの音ハのハのゝいゝゝゝゝ五十字イハの雇語ヨクよ、て卑カヘリ手ハ音ハあり、漢字カハラのハ聲ハの類ハハ、ラリルレロと、りも、重カヘリく口ハと、りハ息ハと塞カヘリて通カヘリざるゝゝ鼻ハへねげゝ音ハと、故ハよ鼻音ハといハつゝり、その鼻ハへねげゝ音ハの中ハよ、

②ハ、殊は鼻へぬるざれば、發聲せざるものも五十音の外あるも、明らるるよて又文字も別は、假り用ひたり。③ウ④ハ、軽く呼時ハ、五十連音の⑤ツ⑥ウ⑦レの字なり、唯鼻音の時ハ、⑧ツ⑨ウ⑩レの書方のも、又其中ハ、⑪ツ⑫ハ⑬ツ⑭と急促りて、たどるへバ、以而とモッテと、⑮ツよて息をあさえて、呼ぶ音の色、是も五十の音のがあること、あはるハあり。⑯ウ⑰レの音ハ、急促鼻へぬるげどて、息ゆるかやあるものも、良もすれば、五十音の音は、俗なるものも、⑱ヒ⑲フの假字は、誤るべし、故此鼻音の字、又其定用格と、能く書きまへて書くべし、こゝとあり、是等の字と、誤りてハ、⑳上㉑下㉒エ㉓オ㉔ヲの違

いより、遙は遠し。①ハ、殊は、分り國字も。②ハ、あゝと形も異なり、字と作り書來しハ、あやまらるへきなり。③ハ、さりとて、國字と、もつゝ、ちり古へ、学ひする、先達たりとら。④ハ、と等し、心得て歌あとも、書るハ、いづれも、や、扱皇國ハ、音聲清く、言靈の、幸行國あるよ、いづれも、かくふ、卑し鼻音と、用ゆるや、と、あや、いづれも、いづれも、あり、り、べし、故、其、と、と、あ、いづれも、いづれも、大ハ、洲國ハ、音正しく、言靈の、幸行の、も、な、ら、ず、天皇の、宮所ハ、いづれも、あ、れ、ハ、天の下、よ、あると、あ、ら、る、事、言の、限、り、又、種々、の、物、凡、て、參、來、り、て、其、貢、る、物、は、皆、そ、れ、く、の、名、あ、り、て、即、ち、其

調物ミツキモノは其名と付添て献ミツるゆたどへハ輕嶋之明宮アサノミヤは、
 天の下知る一ゆ一と大御代オホミコトは百濟國ヒャクサイクニより論語千字
 文其外種々の物モノは其博士シヤクシと添へて献ミツり又師木嶋
 之大宮オホノミヤは天下所知者大御代オホミコトは佛經ブツキョウ并釋迦像シヤカゾウは僧尼
 と添へて献ミツりその物モノは其博士シヤクシと添へて調貢テウコン生ナマハ
 かしらの語コトもさやそのときさうり參來サンライりて皇國ミヤクニの人
 の口クチもも秘ヒ一云イツクニひおひつしハ卑ヒ音ネも混へて軒向ケンキョウ
 小ハ彼貢奉ミツギキヨウりる事物モノと悉く取トルとさめて執行シヨウギンハしり
 ためあげさうり必ず賤セニ音ネもさうり弘ヒロりり又近世チキンセり
 至りてハ紅毛國ベニウシキクニ并あつちる各國クニタチのふどもくあつちる

參來りて是も夫く取トルわづらうとせたまへハ則其國の文
 字も音も又廣く成りたるハ天の下の天皇テウキョウの坐イマスも其國
 ありハあり然シカドモれども言靈コトノミの幸マコトも其國よりわかれハ皇
 國クニ人の口クチは異國コトクニの言コトさうり曇音クモリネのまもハ呼ヨびひり
 なく言コトハ秘ヒセとも音ネハ此國の音なりたどへハ大の聲コトノネ
 とワンワン猫の聲とニヨウニヨウなどまねられ共
 實マコトも犬猫のこころもハまねかざりりこころも一ヤゴ
 又鼻音ハナノネハ漢字カンジの入聲イロネは等ヒトシし音ありども彼入聲ハ
 フムツムキムと息と引返して腹ハラは入イりり也色入聲
 といふありへゴトク法ホウ俗ソク急キウ蝶テフ甲カウナトノフヲウノ列音ノ
 ゴトク唱へテハソノ韻腹ニ入ラズ

コハカノ國ニテハ、ハ、フ、ム、カ、フ、ム、キ、フ、ム、テ、フ、ム、カ、フ、ム、ト唱フル音ナルベシ此ムノコト猶下ニイフベシ
 鼻音の、㊦㊧㊨ハ腹ハ入らばて、其息鼻へゆげ
 由之入聲とハ、聊軽く又此鼻音ハ、五十連音ハ、使ハる
 雇音よて、吾國語のたろよ、役の音あり、これハ、鼻音
 よ、㊦㊧㊨の字と假り用ゆるハ、後の制作なるべし
 と、其用格とあり、あよ、凡人の、態よ、あらば、萬づ事ハ、繁
 ぐ、あるまよ、く、詞の茂ぐありて、誰作り、と、ある、自
 然唱へ出、た、く、ひ、う、さ、て、雇、音、あ、れ、ハ、敷、鳴、の、正、
 子、詞、ハ、立、入、ら、ば、又、語、の、首、よ、立、ず、又、語、の、尾、ハ、
 ざる音あり、あ、ら、ば、よ、此、四、音、と、遣、不、定、格、と、七、却、て、知

る人なり、と、あ、ら、ば、と、前、ハ、宜、長、ガ、三、音、考、の、末
 又音便の、代、る、音、と、何、の、語、ハ、是、彼、の、詞、ハ、何、と、音
 便の、詞、と、捨、ひ、あ、ら、ば、て、書、た、ら、ば、定、格、と、も、言、の、意
 と、も、辨、へ、ば、て、撰、ひ、聚、め、ら、ば、お、も、て、い、ど、撰、り、あ、ら、ば、故
 其、定、る、用、格、と、左、よ、ら、ば、と、見、て、悟、る、べ、し

一、條、第、二、段、の、音、よ、代、る、音、便

㊦よ代るハ ㊧

紙ハ實ノつくらぬ穀こそ死縮あり

㊨よ代るハ ㊩

參昇 參詣 曰

四 下代るハ

ツ

立而

待而

勝而

持而

三 下代るハ

ニ

埴田

伊勢國ノ郷名

錢管

錢ト斗ハ錢也、錢管、錢管、或說ニ錢ヲゼニト云フハ、音便ナリ

ト云リ、蘭ヲラニ紫莢ヲシヲニト云ル例モアリ
レハ、サルコドノ如クナレド、シカラズ、叔此セ
ニラゼニド、濁ルハ國語ノ例ニ、ソムケレト
字音ノセニ、終ルハ、マ、茶、黄、ヲ、グ、ミ、ト、濁リ
シカ、又思フニ、蒲ヲガマ、茶、黄、ヲ、グ、ミ、ト、濁リ
ルガ、ヤガテ、通語トナリテ、濁ルガ、本語ノ如ク
ナリ、類ヒニ、テ、セ、ニ、モ、其、例、ナ、ラ、ム、カ、猶、今、モ
瀨、鐸、瀨、焼、ナ、ト、云、時、ハ、復、リ、テ、清、ミ、テ、云、リ、然、ハ
本ハ、清音ナリシヲ中昔ヨリ濁音ニ轉リタル

成ルベシ、抑、錢、ヲ、セ、三、ト、云、名、義、ハ、サ、シ、三、ノ、轉

語ニテ、二ハ、金ノ、子、三、等、シ、ク、ナ、ニ、又、子、ハ、金ノ

性ナル事、二ハ、卷ニ云リ、サテ、サ、シ、ハ、錢ヲ、數ク

刺コトヲモテ、名付シナリ、故サシノ約リシヲ

ハ、後世ノ詞ニテ、上ト云、或人云、サシノ約リシヲ

ズト云リ、玉ヲサスト云コトハ、イカサ、カ、見ハ

ス、古事記ニ柱ノ神、天ノ浮橋ニ立シテ、活カ

ラモテ、指下シテ、アレバ、言ハ別ナレド、モサ

ス、テ、フ、詞、ハ、ア、リ、又、錢、ヲ、又、ク、ト、ハ、イ、ハ、テ、サ、ス

ト云モ、サ、通、ス、コト、ナ、リ、又、字、書、ニ、繼、ノ、字、セ

ニ、サ、シ、ト、ア、リ、或、書、ニ、ハ、繼、ニ、字、ヲ、サ、シ、ト、訓

モ、テ、注、ニ、錢、ヲ、繁、ク、繩、也、ト、ア、リ、然、レ、ハ、錢、ヲ、貫、ク

繩ヲ、サ、シ、ト、云、ヒ、テ、其、ナ、カ、キ、ヲ、貫、サ、シ、ト、云、又

音サシ、何貫文ナド、云ハルナ、思ヒテ、セ、ニ、ハ、錢

ナリ、字ノ音ニハ、ア、テ、ズ、カ、ナ、ラ、ズ、サ、シ、ニ、ノ、轉、言

直會

直會殿大神宮儀式帳云直會院五丈殿一間
四丈殿一間九丈殿一間云豐受宮儀式帳云
五丈殿長六丈一殿長四丈主神司殿也云神
事隨筆云元祿四年一殿御再興アリニ所宮
各々三殿ヲ直會院ト云トアリ直會ハ直官
人ノ集リ給フ所ナレバ理リモテ直會ノ字
ヲ當給ヒシカ持統紀ニ掌干殞宮云通證掌
訓那米良比豆麻豆流所謂直會也トイヘ
リサヲ直會殿ト云フハ神掌新掌ノ殿ナ
レバ掌會ノ義ニモ有ベシナル時ハナメリ
アヒノメリヲ約メテナシアルハナメリ
アララニ綴シテナウラヒト云ガウハ例ノ
音便ナリ又思フニ大ハオホナルヲ常ニオ
ウト唱フル如ク直會モオノヅカラナウト
唱ヘテ口語ノ音便ナリ口語ノ音便ハ下云
然ラバ直會ヲナウト書ハ誤リナリ

リ
又代るハ

ニ

ツ

剩

祝詞

如件

取而

有而

去而

凝而

借而

買而ハ、カウテ、追而ハ、オウテ也コヲ、カツテ
オツテト云フハ誤リナリ

鼻音ハ、かく弟二段の音よのゝ代り、其餘の音よハ、六
だよ、代るゝゝゝゝ、驛便ハ、早馬便ありと、波由麻豆加
比云云、書紀よハ、波以麻と、ゝゝゝゝ、又伊勢國飯野郡
早馬瀬村と、ハ、マゼと、常よゝゝゝ、是等ハ、(ヤ)の行の片
通ひよて、音便よ、あゝゝ

(二條) 語の間へ更よ加ゝゝゝ音便

八日と

ヤウカ

手斧と

テウノ

馬場ババと

バンバ

備後ビゴと

ビンゴ

備中ビチウと

ビツチウ

豊後ブゴと

ブンゴ

南ミナミと

ミンナミ

東ヒガシと

ヒンガシ

筭タナ

と

タカウナ

竹ヲタカト云ハ上ニ云片通ヒ変格ナリ又
ナト云フハ草ニマレ魚ニマレ酒食ニ添フ

東ヲ日ニ向ス意トスルハ誤リナリ万葉集
一ニ東乃野炎立所見而反見鳥者月西渡ト
アルヲヒムカシノニカギロヒノタツミ
エテカヘリミスレバツキカタブキヌト訓
タルニヨリテ即テ東ヲ日向ノ意ト惑ヒシ
ナリ此初ノ東ハヒクハシノトモ又ヒガ
ハ音便ト四言ニ誤リニベレ此ヒムガシノ
ニ編ニ云フヲ見ベシ語義ハ伊豆母之美豆
ノノ條ニ云東ノ語義ハ伊豆母之美豆

筭ハキ

本語ハキと

ハウキ

冠カサ

本語カブリと

カウフリムリトフト通音

ル物ノ惣名ナリ筭モ藪ニアル時ハタケノ
コト云ヒ採リテ食スルヲタカナト云魚モ海
川ニ浮カビヲル小トハ魚ヲト云ヒ食糲
捕ル時ハ即ダナニテ漁魚釣リナト云ベシ
故筭ヲ作茅葉ニテニハメノ音便ト云フ説
ハアヤマリナリ

冠ヲカブリ筭ヲハキト云フハ
ヒト云類ヒニ詞ノ調ベ音ノ便キヨリ
一言ヲノベテモ又二言ヲ約メデモ唱フナ
リ雖ハヒヒナナルヲ約メデヒナトイヘリ
コラヒ斗ナト書ハ口シ又真淵ガ祝詞考
ニ速佐須良比啐ノ神ノ名ハ次ノ言モテ思
フニ佐須良比ト云フコトナレバ今一ッ比ノ
字有ケムガ落タルナルベシトイハレキコ
ハ落タルニハアラスオノヅカラ省カル調
ベナリ比比羅木之其花麻豆美神又比比羅

三條

木之、八尋系亦有ハ、重リテ、調ベ宜シケレバ、此比ト重キ唱ル也、コヲヒキト唱ラハ、口語音便

韓櫃と

カラウト

素人

シロウト

仕奉と

ツカマツル

貴

タウトキ

弟と

ヲト

妹

イモウト

語ノ同ナルハヒフヘハ、ハオノツカラ、音便ル例ヲシ、其省カリタル、跡ヲ引音ニ、唱ヘルハ、音便ノウナリ、又和名抄ニ弟ヲ於止字、伊モ字止トアルハ、中昔以後ノ詞ニテ、和名抄ニ於止字トアルハ、於ハ誤リナリ、ルヲ、古事記傳ニオトヒト、イモヒトノ音便ナリト、語義モ、ワギマヘ又ヒガコトナリ、族ノ名義ハ、伊豆母之美尋麻ニ篇ヲ見テ、ルベシ

四條

本語約リたるヤ加ふる音便

卿

ツリの約

マウケギミ

童部

ラハの約

ワラニベ

骨蓬

ハハの約

カウホネ

新田

ニヒの約

ニツタ

殆

トハの約

トント

賜

マハの約

タババリ

専女

タクの約

タクメ

給

マヘの約

タクベ

藁鞋

ラクの約

ワラニツ

右四種の音便の中、始りの一門ハ、正音より代る、音便なり。次、この三門ハ、正音と助くる、音便あり、惣て音便ハ、上より下へ、こゝろく、語の中よのみ、用ひて、語の首尾ハ、用ひず、然るも、四種の介よ、変格一種あり、そハ四言の語より、其四言の第二、第四、用ひる格あり、次ぎ又例と云

五條 変格の音便

漸と ヤウヤク

語の間へ唯よ加りる (二條)

絹垣と キンガレ

上ハ者よりて加りる (三條)
下ハ代りて加りる (一條)

透垣と スレカレ

上下去よ代りて活く (一條)

蜻蛉

トシホウ

大約りたる加りる

(四條)

凡方ノ虫始ルハ、這ク虫ニテ羽オヒテ飛フ
虫トナルナリ故昆虫ト云フ中ニ蜻蛉ハ元
ヨリ飛虫ニテ生ル、ユエ飛虫ト号シナラ
ム故ヒムシノ、三言ヲ約メテ、ヒノ一言ヲ、小
ニ轉シテトホト云フ中へ音便ノ、トヲ加ヘ
下ニ、カキロヒ、又カケロフ、又アキツ虫ト云
キヲ、赤トム、ホウト云ハ、秋ノ始、群リ飛フカ
俗ニ、赫クコトク、ナレハ、号シナラム、カケロ
火ノ、フハ、トク、ナレハ、号シナラム、カケロ
フノ、フハ、トク、ナレハ、号シナラム、カケロ
ラ又、意ニテ野郎ヲ、影カト云フニ、等シク、又
アキツ虫ハ、赤ツ虫ナリ、又上ニ云、万葉ノ哥
ノカキロヒハ、陽炎ニテ、別ナリ

箒

カウカレ

たゞよ代りて活く (一條)

箒ハ、髪串ニテ、タシ、ダラ、カニ、轉シテ、カミカシ
ト云フヲ、ミヨウ、シラレ、ニ代リタル音便也

或書ノ説一王叙ヲ髮刺并ヲ髮櫛ノ轉リシ
 語ト云ルハ、聞ヘタル事ナレトモ、イカバカニ
 サシハカサシヨ音便ニ唱フルニテ「百敷の
 大宮人ハ服有とヤ櫛りさ」て今も此
 ナト大キナル枝ヲ折テカクモカサス
 ナレト又小キ枝ヲ髮ニ刺モカサスナリ
 ソヲ甲牙金銀ニテ備髮ニ刺カサスナリ
 音便ハ、東南ナト、同シ（二條）格ナリ又并ハ
 軍陣ニテ乱タル髮ヲ卷上ケ、留ル具ニテ
 ヲ後ニ殺シテ、女ノ髮ノ錫リトナリタルモ
 ノニテ元ヨリノ名ナリ、猶イハバ上古ノ男
 十六七歳ノ比ハ髮ヲ髻ニ解髮ニシテ留ル
 串モ等シク棒ナルベシカミカキト云ルコ
 トハ、イカナル心カ髮ハケツルトイヒテカ
 クトハ、イハズ髮串ハ、火串魚串、候串、幕串、ナ
 ト云串ニテ串ハ刺力要ナリサレバ、櫛ハ
 ソノ名木ヨリ出タルナリ、又解梳ハ、櫛ノ繁
 キ櫛ニテコハ毛櫛ノ具ナリ、ソノケスヲ約
 メテ、クトイヒリシハ、活用辭ニテ、畧キクシ

ト号シカ、又頭ヲミクシ、髮ヲオクシ、ナト云
 モ、此櫛ヨリ出タル名カ、又髮ヲトクト云ハ
 毛櫛コトナレトコハ、其毛櫛トキ、結ビタル
 髮ヲ先ツ解ユ、後ニ設ケタル名成ベシ、是
 等ハ、序ガ私ノ考ニテ定テハ、云ヒカ、タシ、又
 髮ヲ揚ルト云フハ、タレタル髮ヲアケムス
 フコトナリ

音便の假字用格ハ、上の四條と、次の変格と、よて、此格
 よ、違ふハ、若古き、櫛諸あどよ、あうとも、誤りと、あつべ
 ーぎぞ、又白粉と、あしろひと、書もあやまりなり、紅粉
 ハ、あひろ、白粉ハ、あしろとよ、ひべー、古くハ、あろひも
 のとも、えへたり、こハ、櫛と、語重なる、あ、シロキ、櫛と、音
 便よ、シロレ、櫛と、え、あ、よ、て、語の連うねと、オシロレ、又

語ハ又反ノ音ヲ
ハ、ワ、ロ、シ、ク、ナ、リ、又、射、于、玉、ヲ、ウ、バ、タ、マ、ト、書、ク
峯トトヲゲ 候とソヲロウ 日向とヒウカ

一ムトフト通ヒテ再ヒ清ミテ唱フルユ又弟
又弟二段ノ音ヨリ續クムハヨノコトクヒキ
ヒ、ク、ナ、リ
懇と子ゴロ 汝とナニチ 譽田と小ニダ

是等ノ国字ヲト書ハワロシムト書ク
ベシムハ其本語ト書ハ其通ヒナリ神主巫ヲ
カカルトモ書懇汝譽田ナドハ本語ムナレバ
子ノゴロナシホスダト音便書ハ非也
川 澤 繩 鍬 鯛 鯉

白 葵 灰 貴 夕 命
袍 苗 猶 汝 氷 顔

是等ノ類ヒ甚多シ口語ニハ
如ニ便ケル本語ノ通りハ
逢 漸 買 候 巫 往來

貴 給 可 這 舞 眞座

アヤカサタハマソトノ音ヲ
ル時ハオヨコソトノ音ヲ
便ケル第一段ノ音ト知ルベシ元ヨリ第五
段ノ音ナルハイトスキナシ
夫ヲフト昨日ヲキナリ
夫クハ生負追ハオナリ
活キ辞ハ生負追ハオナリ
ソハ問ハト此ハタラキハ
リテハキナリ如クヒバケル
ハタラキナリ

上件よすふ、口語の音便と能く嘗てあるべし又語
 の中トよて、ワ斗ウエヲと呼ぶ音ハ、オホカク分ハハヒフヘ
 小のひびきよて、ワ斗ウエヲあるハ、いとよくるゝシラ綴
ヨウイワシ弱繭タウシ依撓オホシ騷オホシ義理オホシ位率オホシ地震オホシ神門オホシ汝騷オホシ詣オホシ
也音便ノウニ
非參オホシ鬢オホシ髮オホシを見オホシ鳥オホシ羊オホシ和名抄オホシ久和伊オホシトオホシ泡オホシ乾オホシ暴オホシ音オホシ紅オホシ曰オホシ申オホシ
申ノ字常ニマウスト云フハ腸オホシ殖オホシ未オホシ巴オホシ居オホシ故オホシ杖オホシ鑄オホシ業オホシ藍オホシ梢オホシ
音便ノウニ非ヲノ轉言也聲オホシ魚オホシ凡オホシ是オホシ等オホシありオホシ此外ハ、ワ斗ウエヲと、便ぐ語もあふ
 うたハ、ハヒフヘ小の字あり書りくぐるとよ、心とこち
 て、誤るゝやうよ、かくべしあり、今天の下の、(元)(三)(ヲ)(ハ)
 調ひ、世間泰平よ治り、萬ののり、上古の状よ、立歸らひ

時よ至りて、まてよ、國字も世よあり、せん出わと、ハ、國
 字の用格も、まてよ、とく、く、櫻りよかくハ、拙オホシ字オホシ業オホシよ
 な、ひあり、く、皇國の國風よ、意ど、その、深オホシ子オホシ業オホシハ、く
 学びてよ

ん之字 兼 假字之辨

ん之の字よ、付て、漢字の假字の事、先達種々の説あり
 ども、吾國字と知るゝ者、の説あり、ハ、證とす、るよ、足
 ら、柳之の字の本形たるや、始よ著オホシ五オホシ十オホシ連オホシ音オホシのオホシ圖オホシ字オホシ
 フオホシ王オホシ上オホシ土オホシの中オホシトオホシのオホシ行オホシありオホシ、Fオホシのオホシ字オホシなりオホシ、代オホシ字オホシハオホシ△オホシの
 字なり、平字ハ、①の字あり、然るを、ソ、ア、ウ、心オホシの、と去オホシ

るべし、上又云ふ、入聲の法急蝶甲あどりの、フノ竟フム
 と唱ふべし、音とりへふムハフムと唇と閉て出る息
 と塞ふ音よせりのムハ鼻音のニより一一段重一平
 上去のムハ唇と拍てまぐく又固くムよて鼻音のニ
 りハ軽き音あるべし然れども前よりソソソソ余文
 学韻学よ疎しく元五十連音よせしる用わけをば教
 て求りず今爰よ説くところハ、乙壬上七の法則よ
 りて初学の輩國字と知るるりあるは國字の用格
 と誤り惑ふと諭すなり固よ吾思ふまくと述るのニ
 夫言皇靈理と解らうよせしと欲する者ハ天地の理

りと詳よするよわらうと詳よせしと欲する者ハ
 先天地の大元と知るよわらうと明らうよして後父
 母と知るよわらう父母と知りて後己が身體と知るよ
 わらうと知りて後母の胎内よどり十月のひらき
 りて後母と知りて後吾の息の
 出入音聲の發ることらりことらりたつて音の
 清濁りより重子軽子のありと吾心よわらうと
 明らうよ、わらうと吾ハいよ天地ハ言皇靈の宮室よし
 て萬物の大元祖あると詳よとてかくのころとく
 天地の理りとわらうよするときはハ初よ論らう如く

皇國の御教^{ニクニ} フ 七 上 七 の故由と學ぶことと知るべ
 かく教の法則と定て學ぶ時ハ君臣の道ありて父
 母は事まづり、朋友は交ると始家と俗り身ととさむ
 るよ、至るまで此のりといづるゆな、一と云うるは始よ
 辨るがごとく、輕嶋の宮は百濟より、漢籍と真奉し
 ろり、いつア一國字と志し、漢字は眼縁して其源と捨
 て言靈の字ハ跡あり中よ、寛弘長和の頃よりい
 づとあつて、あつて人稀あり、竟は數千年の間五十連音
 の烈位と ア カ サ タ ナ ハ マ ヤ ラ ワ と置り、つゝいよ五十
 連音ハ吾國字の始成事とあつて、人なぐ吾皇國ハ八字無

言葉とめて、文章とあす、抑て、俗人とあつて、
 なること、元録の頃より、契沖勲より、平字用格事發
 起で、より、年々盛よ成れんと、と、ひり、一 字の起元
 とあつて、けり、故よ、世々の先達議論多く、て、言靈と
 詳よ、あつて、あつた、と、漢字よ、て、假字書よ、る、ゆ、め、と、
 圖的とあつて、よ、あつて、然よ、始著大己貴神御傳 フ 七 上
七 三種の圖と得て、始て、吾大日本大道成事とあつて、此
 度此書と著國學とあつて、者の楷梯とあつて、ゆ、あ、り、と
 より、各議論ハ置皇國よ、生、より、人、ハ、皇國の大道天
 地の教令と、あつて、漢國の道と學時ハ漢國と見、

の漢國人也又國學暗き時皇國又生て皇國人又非ざ
 るが如しいしゆの其根正一かきざりてハ枝葉全くさずと
 既し書紀序舎人親王曰吾神國道根也儒佛兩道枝葉也
 云宜哉今ハ枝葉繁茂一々其根見へど枯らし返くも皇國道よ
 意の深筆ハ國道明りて後異國道とも学び而後道の本末
 明りよらべ一如斯道の本末明ら成時ハ自ら皇國の尊
 事と知らべ一必初学の筆言靈の教と疎りて天神地祇
 のとかりを蒙りしるなるわあうと慎のべ一
 伊豆母之美妻麻三之卷

芬木元達校正

元治元甲子年初冬

- 出雲寺萬次郎
- 岡田屋嘉七
- 山城屋佐兵衛
- 和泉屋金右衛門
- 須原屋茂兵衛
- 須原屋新兵衛
- 須原屋伊八發

江都書林

